

安政元(1854)年閏7月21日～昭和9(1934)年1月28日。姫路藩出身。江戸の姫路藩中屋敷で生まれる。幼少より文武にはげみ、明治2(1869)年に開成所が創設されるやただちに入学、4年に貢進生となり、大学南校に学び、8年に最初の文部省留学生として、フランスで諸芸学を修めることとなる。12年にエコール・サントラルを、また13年にパリ大学理学部を卒業して帰国し、内務省土木局に入る。17年から新潟に赴き、信濃川、阿賀川、庄川など直轄工事を監督する。19年に工科大学教授兼学長となり、土木局は兼務となる。21年から22年にかけて山県有朋(内務大臣、陸軍中将)の欧州出張に随行する。23年に土木局長となり、土木局が主務で工科大学は兼務となる。なお、23年には最初の貴族院勅選議員になる。27年から土木技監となり、29年から土木局長を兼務する。31年7月に土木技監兼土木局長も工科大学教授兼学長も辞任する。31年11月から33年12月まで逓信次官となる。36年3月に鉄道作業局長官となり、同年11月に京釜鉄道株式会社総裁となる。39年6月から40年6月まで統管府鉄道管理局長官となる。39年9月に帝國学士院会員となる。大正3(1914)年に土木学会が創立され、初代の会長となる。6年から10年ま

で理化学研究所長となる。9年に學術研究会議が創設され、初代の会長となる。13年から招密顧問官となり、多くの役職を辞任する。昭和4(1929)年に萬国工業会長となり、萬国工業会議を東京で開催する。7年から日仏会館理事長となる。

内務大臣の山県有朋から重用され、内務省土木局の体制を整備した。明治24年に土木監督署長として石黒五十二(東京)、小林八郎(仙台)、小柴保人(新潟)、神野忠雄(大阪)、日下部弁二郎(広島)、岡 胤信(久留米)を配置したとき、新旧交替は達成された。また、近藤虎五郎を奨励して河川法などの制定を準備した。工科大学教授としては、河川、港湾、運河工学を担当し、工科大学長としては広い視野に立って水準の高い工科大学を構想し、それを見事に実現した。その後の工学、工業の発展を省みるとき、古市の功績はどのように評価しても大きすぎることはない。

日露戦争に際し、古市公威は多年の懸案であった京釜鉄道を達成し、戦後も京城にとどまって朝鮮における鉄道網の定礎に専念した。古市の業績は高く評価され、南満州鉄道会社の初代総裁に強く推されたが、後藤新平を適任として受けなかった。